

## 編 集 後 記

来るべき21世紀に向けて、日本の社会も急速に変貌してきている。しかし、それは生まれでる新しいいきいきとした変化ではなく、過熟期にある退行的な変化であるかに見受けられる。一方、医学界にあっては、日々新機軸が提案され、技術革新も相俟って休むことなく進歩前進している。消化器外科学は外科学の基盤であり、その発展には医学界、外科学会をリードするものである。日本消化器外科学会は医学の進歩発展の先頭に立つと共に、さらに地道に“患者のための医療”という土台にしっかりと足をすえて、消化器外科医の進むべき道を照らす燈台となるべきであろう。

さて、日本消化器外科学会の消化器外科医育成の努力はその発展の目的の一つでもあり、最も重要な責務とも言える。若き外科医を育てるということは“考える人”、“創造する人”を育成することであり、“人類の明日への幸福と発展”につながるものであると信じている。

日本消化器外科学会は他学会に先んじて独自の専門医制度を培ってきたが、専門医制度の改革にあっても山岡専門医制度委員長の努力により、医学界の先頭に立って取り組んでいる。この専門医制度委員会と共に消化器外科医教育のもう一方の旗頭が佐治委員長の率いる日本消化器外科学会会誌編集委員会である。歴代の故村上委員長、鍋谷委員長、大原委員長、現佐治委員長と、いずれも万人の認める猛者であり、これら委員長に従う委員の先生方のご苦勞は察するに余りあるところである。毎月、10編前後の論文を、時に徹夜しながら隅から隅まで目を通し、懇切丁寧に査読して訂正し指導することは並大抵ではない。三人一組での査読作業は他のお二方の迷惑を考えると手を抜くことも、休むこともままならない。そのお陰で多数の論文を読むことができ、査読技術が向上することで自らを慰めている。若き外科医の育成が人類の幸福につながり、少しでも良いことをすることで自らの徳を積むことになるとも信じている。しかし、6年間という長い編集委員の責務を終え、任期満了で引退される委員の先生方の本当に嬉しそうな様子は、今頃になってなるほどとうなずけるところである。今後共、会誌の編集を通して日本消化器外科学会の発展に少しでも寄与できるよう努力していきたい。

(幕内博康)